3

筑波大学の過去・現在・未来

筑波大学を人生の通過点として過ごし、今は他の組織で現役として活躍している人達もかなりの数にのぼる。そういう人たちにとって、筑波大学はどういう意味を持つ存在なのだろう。筑波大学を〈過去〉として持つ方々の〈現在〉の眼には、その〈未来〉はどう映るのか。筑波大学への要望や期待を語っていただいた。

回想と筑波大学への期待

東和憲
前筑波大学学務部大学院課課長補佐
現北海道大学学務部留学生課長

創設期を振り返って

私が、筑波大学に勤務したのは、福田信之先生が学長に就任されたいわゆる創設時期の昭和55年(1980)4月から平成6年(1994)3月の14年間である。この間、経理部、総務部、学生部及び学務部に在籍し、いろいろな職種を経験することができた。

始めに、経理部の医学事務区経理を担当していた時は、創設期の７年目ということから、大型設備費の重点配分があり、医学系機器の購入に追われたことを記憶している。当時、年度末は、ほとんど毎日のように徹夜状態が続いたが、スタッフが若いということもあり、また職務に対して、意気に感じ、一丸となって取り組んだことを記憶している。

その後、総務部情報処理課では、事務電算化計画に携わり、当時の事務用言語であったコボルによる学内研修を担当し、理解と普及に努めるとともに、経理部の協力の下、共同構内に張り巡られていた学内ランを利用した全学利用システム「授業料収納システム」を立ち上げた。

次に、病院部総務課では、当時社会的話題であった脳死判定に関わる委員会に携わり、人の死に係わることから、緊張して資料の作成をしたことを覚えている。

次に、学生部厚生課では、学内キャンパス、特に学生宿舎エリアには、公衆電話機の設置数が少なく緊急時の連絡等に支障があると、学生及び父母等から居室に電話を設置できるようにしてほしいという要望が高まっていた。私達は、文部省及び学内外の関係者との困難な調整を経て、学生宿舎54棟、約3,600室への電話の設置が可能となった。また併せて寮電話システムを導入したことから、日本人学生及び外国人留学生の利便に大いに供することができた。当時、学長をされていた阿南功一先生が大変喜ばれたことを記憶している。

次に、学務部大学院課では、筑波研究学園都市内の国立・民間企業等の研究所等研究者を国立大学の客員教授又は客員助教授として迎え入れて大学院生が直接研究指導を受ける方式、いわゆる連携大学院方式の設置、また、大学院修士課程バイオシステム研究科の設置では、国立大学で初めてカタカナを用いた名称の研究科の設置であることや社会人受入れ枠、留学生受入れ数の定員化等で当時の文部省大学課の担当者と激しく議論したことを想いだす。

翻って、当時は、どの部署でも新しい試みを軌道に乗せることは大変であったが、その時々においては、関係者の協力を得なければ成し遂げられないことばかりであり、良い思い出となっている。

法人化に向けて

筑波大学は、10月1日、開学30周年を迎えることとなりますが、その10年前の開学20周年記念式典時に祝辞来賓として出席された、当時の東京大学学長の吉川先生が国立大学協会を代表して祝辞を述べられ、その中で大変感激した言葉があったので、ご紹介したいと思います。「これからの国立大学は、教育・研究あるいは管理組織等について、大学毎に独自の創意によってそれぞれの方法を作って行くことになりましょう。明治の成功を思いおこす迄もなく、それは必ず成功するであろう明るい道であると思います。このとき、私たちには、一人の先輩がいることに気付きます。それが筑波大学であります。筑波大学が20年に亘って、いわば孤独なランナーとして、新しい大学を求めながら、大変な努力と苦労を続けて来られたことが、今、設置基準の大綱化の時代を迎えて、全く新しい意味をもって登場して来たと言えます。・・(略)・・」と言っておられます。

平成16年4月から、すべての国立大学は国立大学法人となりますが、各大学は、法人化に向けて各々の大学がいかに魅力ある大学創りをするかの準備を進めている中で、筑波大学は、吉川学長の祝辞で述べられているように、筑波大学の各種の取り組みが、常に他大学のモデルとして進んで行く宿命にあると思います。

おわりに

筑波大学は、建学の理念として「開かれた大学」、「学際性」、「国際性」を基本的性格として掲げて邁進してこられました。これから今まさにその真価が問われるとともに更なる新しい機軸を打ち出すチャンスではないかと思っています。そして今までもそうであったように、これからも常に新しい試みを続けていく大学になってほしいと切に願うものです。

(あずま　かずのり)